

試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

Z

国語

(200 点)
(80 分)

注 意 事 項

- 1 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 2 この問題冊子は、49 ページあります。問題は4問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「古文」、第4問は「漢文」の問題です。
なお、大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも、試験時間は80分です。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
1 0	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 6 不正行為について
 - ① 不正行為に対しては厳正に対処します。
 - ② 不正行為に見えるような行為が見受けられた場合は、監督者がカードを用いて注意します。
 - ③ 不正行為を行った場合は、その時点で受験を取りやめさせ退室させます。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

国

語

(解答番号

1

～

37)

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

(注1)

鐔(つば)というものを、ふとした機会から注意して見始めたのは、ここ数年来の事だから、未だ合点(がてん)のいかぬ節もあり、鐔に関する本を読んでみても、人の話を聞いてみても、いろいろ説があり、不明な点が多いのだが。

鐔の歴史は、無論、刀剣とともに古いわけだが、普通、私達(たち)が鐔を見て、好き嫌いを言っているのは、室町時代以後の製作品である。何んと言つても、応仁の大乱(おうにん)というものは、史上の大事事件なのであり、これを境として、**A** 日本人の鐔というものの

見方も考え方も、まるで変(かわ)つて了(しま)つた。所謂鐔なるものは、この大乱の産物と言つてよいのである。私は鐔を弄(い)つてみて、初めて、この事実にはつきり氣附(きづ)いた。政令は無きに等しく、上下貴賤(きせん)の差別なく、ドウ(ア)リヨウ親族とても油断が出来ず、毎日、ただ強い者勝ちの刃傷沙汰(にんじょうさた)に明け暮れるというような時世が到来すれば、主人も従者に太刀(たち)を持たせて安心してゐるわけにもいくまい。いや、太刀を帶取(おびとり)にさげ佩(は)いているようでは、急場の間には合(あ)わぬという事になる。やかましい太刀の拵(こしらえ)などは、もはや問題ではない。乱世が、太刀を打刀(うちがたな)に変えた。打刀という言葉が曖昧(あいまい)なら、特権階級の標格(ひょうかく)たる太刀が、実用本位の兇器(きようき)に変じたと言つていい。こんな次第になる以前、鐔は太刀の拵全体の中の、ほんの一部に過ぎなかったのだが、拵無用の打刀となつてみても、実用上、鐔という拵だけは省けない。当然、実用本位の堅牢(けんろう)な鉄鐔の製作が要求され、先ず刀匠や

(注5)

甲冑(かづ)師(し)が、この要求を満(みた)すのである。彼等が打つた粗朴(そぼく)な板鐔は、荒地にばらまかれた種のようなものだ。

誰(だれ)も、

乱世を進んで求めはしない。誰も、身に降りかかる乱世に、乱心を以て処する事は出来ない。人間は、どう在ろうとも、どんな処(ところ)にでも、どんな形ででも、平常心を、秩序を、文化を捜さなければ生きて行けぬ。そういう止(や)むに止まれぬ人心の動きが、兇器の一部分品を、少しずつ、少しずつ、鐔に仕立てて行くのである。やがて、専門の鐔工(たんこう)が現れ、そのうちに名工と言われるものが現れ、という風に鐔の姿を追つて行くと、私の耳は、乱世というドラマの底で、不断に静かに鳴っているもう一

つの音を聞くようである。

(注6) 信家作と言われる或る鐔に、こんな文句が彫られている。「あら楽や人をも人と思はねば我をも人は人とおもはぬ」。X 現代

人が、言葉だけを辿つて、思わせぶりの文句だとか、拙劣な歌だとか、と言つてみても意味がないのである。これは文句ではない。鉄鐔の表情なので、眺めていれば、鍛えた人の顔も、使った人の顔も見えて来る。観念は消えて了うのだ。感じられて来るものは、まるで、それは、荒地に芽を出した植物が、やがて一見妙な花をつけ、実を結んだ、その花や実の尤もな心根のようなものである。

鐔好きの間で、古いところでは信家、金家と相場が決つている。相場が決つていふ事は、何んとなく面白くない事で、私も、初めは、鐔は信家、金家が気に食わなかったが、だんだん見て行くうちに、どうも致し方がないと思うようになった。花は桜に限らないという批評の力は、花は桜という平凡な文句に容易に敵し難いようなものである。信家、金家については、はつきりした事は何も解つていないようだ。銘の切り方から、信家、金家には何代かが、何人かがあつたと考えられるから、室町末期頃、先ず甲府で信家風の鐔が作られ、伏見で金家風の鐔が作られ始めたというくらいの事しか言えないらしい。それに夥しい贋物が交つて市場を流通するから、厄介と言えは厄介な事だが、まあ私などは、好き嫌いを言つていけば、それで済む世界に在るのだから、手元にあるものを写して貰つた。

(注8) 井戸茶碗の身元は不詳だが、茶碗は井戸という言葉はある。同じ意味合いで、信家のこれと思うものは、鐔は信家という度げな顔をしている。井戸もそうだが、信家も、これほど何でもないものが何故、こんなに人を惹きつけるか、と質問して止まないようである。それは、確定した形というより、むしろ轆轤や槌や鑿の運動の節奏のようなものだ。信家は、武田信玄の鐔師で、信という字は信玄から貰つた、と言われている。多分、伝説だろう。Y だが、事実ではあるまいと言つたところで面白くもない事だ。伝説は、何時頃生れたのだろう。「甲陽軍鑑」の大流行につられて生れたのかも知れない。「甲陽軍鑑」を偽書と断じ

たところで、幾つでも偽書が現れるほど、武田信玄や高坂弾正の思い出という本物は、生き生きとして、当時の人々の心に在った事を想えば、別段面白くもない話である。何時の間にか伝説を生み出していた鐔の魅力と伝説であつて事実ではないという実証とは、何んの関係もない。こんな解り切つた事に、歴史家は、案外迂闊なものなのだ。魅力に共感する私達の沈黙とは、発言の期を待っている伝説に外なるまい。

信家の鐔にぶら下つているのは、瓢箪で、金家の方の図柄は「野晒し」で、大変異つたもののようだが、両方に共通した何か一種明るい感じがあるのが面白い。髑髏は鉢巻をした蛸鮎のようで、「あら楽や」と歌つても、別段構わぬような風がある。

この時代の鐔の模様には、されこうべの他に五輪塔やら経文やらが多く見られるが、これを仏教思想の影響というような簡単な言葉で片附けてみても、**B** どうも知識の遊戲に過ぎまいという不安を覚える。戦国武士達には、仏教は高い宗教思想でも

なければ、難かしい形而上学でもなかったであろう。仏教は葬式の為にあるもの、と思つて今日の私達には、彼等の日常生活に糧を与えていた仏教など考え難い。又、考えている限り、クウ(イ)バクたる問題だろう。だが、彼等の日用品にほどこされた、仏教的主題を持った装飾の姿を見てみると、私達は、何時の間にか、そういう彼等の感受性のなかに居るのである。

何時だったか、田辺尚雄氏に会つて、平家琵琶の話になった時、平家琵琶ではないが、一つ非常に古い琵琶を聞かせてあげよう、と言われた。今でも、九州の或る処には、説教琵琶というものが遺つているそうで、地鎮の祭などで、琵琶を弾じながら、

経文を誦する、それを、氏の音楽講座で、何日何時に放送するから、聞きなさい、と言われた。私は、伊豆の或る宿屋で、夜、ひとり、放送を聞いた。琵琶は数分で終つて了つたが、非常な感動を受けた。文句は解らないが、経文の単調なバス(注17)の主調に、絶えず琵琶の(ウ)バンソウが鳴っているのだが、それは、勇壮と言つてもいいほど、男らしく明るく気持ちのよいものであつた。これなら解る、と私は感じた。こういう音楽に乗つて仏教思想は、学問などに用はない戦国的一般武士達の間に滲透したに

違ひない、と感じた。仏教を宗教だとか思想だとか呼んでいたのでは、容易に解つて来ないものがある。室町期は時宗の最盛期であつた。不明なところが多すぎるが、時宗は民衆の芸能と深い関係があつた。乱世が来て、庶民的な宗教集団は、庶民と

(注19)

もに最も早く離散せざるを得なかったであろうが、沢山の遊行僧は、従軍僧として戦場に入り込んでいたであろう。彼等は戦うものの最期を見届け、これをその生国の人々に伝え、お札などを売りつけて、生計を立てていたかも知れない。そういう時に、あのような琵琶の音がしたかも知れない。金家の「野晒し」にも、そんな音が聞えるようである。

鉄鐺は、所謂「下剋上」の産物だが、長い伝統的文化の一時の中断なのだから、この新工芸の成長の速度は速かった。平和が来て、刀が腰の飾りになると、鐺は、金工家が腕を競う場所になった。そうなった鐺は、もう私の興味を惹かない。鐺の面白さは、鐺という生地が化粧し始め、やがて、見事に生地を生かして見せるごく僅かの期間にある。その間の経過は、いかにも自然だが、化粧から鐺へ行く道はない。

(注20)

鉄の地金に、鑿で文様を抜いた鐺を透鐺と言うが、この透というものが鐺の最初の化粧であり、彫や象嵌が発達しても、鐺の基本的な装飾たる事を止めない。刀匠や甲冑師は、ただ地金を丸く薄く固く鍛えれば足りたのだが、いつの間にか、星だとか花だとか或は鎌だとか斧だとか、日常、誰にでも親しい物の形が、文様となって現れて来た。地鉄を鍛えている人が、そんな形を抜きたくったのか、客の注文に答えたのか、そんな事は、決して解る筈がないという処が面白い。

C

もし鉄に生があるなら、水をやれば、文様透は芽を出したであろう。装飾は、実用と手を握っている。透の美しさは、鐺の堅牢と軽快とを語り、これを保証しているところにある。様々な流派が出来て文様透がだんだん巧緻になっても、この基本の性質は失われない。又、この性質は、彫や象嵌の世界でも、消極的にだが守られているのであり、彫でも象嵌でも、美しいと感ずるものは、必ず地金という素材の確かさを保証しているように思われる。戦がなくなり、地金の鍛えもどうでもよくなって来れば、鐺の装飾は、大地を奪われ、クウ(エ)ソな自由に転落する。名人芸も、これを救うに足りぬ。

先日、伊那にいる知人から、高遠城址の桜を見に来ないかと誘われた。実は、この原稿を書き始めると約束の日が来て了つ

たので出掛けたのである。高遠には、茅野から杖突峠を越えて行く道がある。峠の下に諏訪神社の上社がある。雪を残した八ヶ岳の方から、冷たい強い風が吹いて、神社はシン（オ）カンとしていた。境内の満開の桜も見る人はなかった。私は、高遠の桜の事や、あそこでは信玄の子供が討死したから、信玄の事など考えていたが、ふと神殿の後の森を見上げた。若芽を点々と出した大木の梢が、青空に網の目のように拡がっていた。その上を、白い鳥の群れが舞っていたが、枝には、近附いて見れば大壺ほどもあるかと思われる鳥の巣が、幾つも幾つもあるのに気附いた。なるほど、これは桜より余程見事だ、と見上げていたが、私には何の鳥やらわからない。社務所に、巫女姿の娘さんが顔を出したので、聞いてみたら、白鷺と五位鷺だと答えた。樹は何の樹だと訊ねたら、あれはただの樹だ、と言って大笑いした。私は飽かず眺めた。そのうちに、白鷺だか五位鷺だか知らないが、一羽が、かなり低く下りて来て、頭上を舞った。両翼は強く張られて、風を捕え、黒い二本の脚は、身体に吸われたように、整然と折れている。嘴は延びて、硬い空気の層を割る。D 私は鶴丸透の発生に立会う想いがした。

(小林秀雄「鐔」による)

(注) 1 鐔——日本刀で、柄と刀身の間にはさむ装具(次ページの図を参照)。

2 帯取にさげ佩いている——帯取(太刀を結び付けるひも)で腰からさげている。

3 打刀——相手に打ち当てて切りつける実戦用の刀。

4 標格——象徴(シンボル)。

5 甲冑師——かぶとやよろいなどの武具を作る職人。

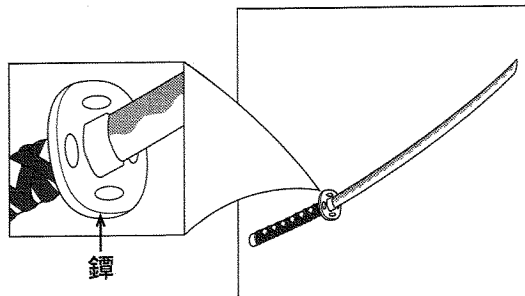
6 信家——桃山時代の代表的な鐔工。金家も同じ。

7 写して貰った——この文章にはもともと写真が添えられていた。ただし、ここでは省略した。

8 井戸茶碗——朝鮮半島産の茶碗の一種。

9 節奏——リズム。

- 10 甲陽軍鑑——武田信玄・勝頼^{かつより}二代の事績、軍法などを記した、江戸時代初期の書物。
- 11 高坂弾正——高坂昌信^{まさのぶ}(一五二七～一五七八)。武田家の家臣。「甲陽軍鑑」の元となった文書を遺したとされる。
- 12 野晒し——風雨にさらされた白骨。特に、されこうべ(頭骨)。
- 13 五輪塔——方・円・三角・半月・団の五つの形から成る塔。平安中期頃から供養塔^{くようた}・墓塔として用いた。
- 14 形而上学——物事の本質や存在の根本原理を探求する学問。
- 15 田辺尚雄——東洋音楽を研究した音楽学者(一八八三～一九八四)。
- 16 平家琵琶——「平家物語」を語るのに合わせて演奏する琵琶の音曲。
- 17 バス——低音の男声。
- 18 時宗——浄土教の一派。一遍^{いっぺん}(一二三九～一二八九)を開祖とする。
- 19 遊行僧——諸国を旅して修行・教化した僧。
- 20 象嵌——金属などの地に貝殻など別の材料をはめ込んで模様を作る技法。
- 21 地鉄——鉄の地金のこと。



問 1

傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(ア)

ドウリヨウ

1

- ⑤ セイリヨウな空気
④ なたらかなキュウリヨウ
③ 荷物をジュリヨウする
② チリヨウに専念する
① 若手のカンリヨウ

(イ)

クウバク

2

- ⑤ バクガトウを分解する
④ 江戸にバクフを開く
③ サバクを歩く
② 冗談にバクシヨウする
① 他人にソクバクされる

(ウ)

バンソウ

3

- ⑤ 著書がジュウハンされる
④ 見本品をハンブする
③ 資材をハンニユウする
② ハンカガイを歩く
① 家族ドウハンで旅をする

(エ)

クウソ

4

- ⑤ 美術館でソゾウを見る
④ 被害の拡大をソシする
③ 緊急のソチをとる
② ソゼイ制度を見直す
① ソエンな間柄になる

(オ)

シンカン

5

- ⑤ 広場はカンサンとしている
④ 勝利にカンキする
③ ユウカンな行為をたたえる
② 規制をカンワする
① 証人をカンモンする

問2

傍線部A「日本人の鐔というものの見方も考え方も、まるで変っていった」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 鐔は応仁の大乱以前には富や権力を象徴する刀剣の拵の一部だったが、それ以後は命をかけた実戦のための有用性と、乱世においても自分を見失わずしたたかに生き抜くための精神性が求められるようになったということ。
- ② 鐔は応仁の大乱以前には特権階級の富や権力を象徴する日用品としての美しさが重視されていたが、それ以後は身分を問わず使用されるようになり、平俗な装飾品としての手ごろさが求められるようになったということ。
- ③ 鐔は応仁の大乱以前には実際に使われる可能性の少ない刀剣の一部としてあったが、それ以後は刀剣が乱世を生き抜くために必要な武器となったことで、手軽で生産性の高い簡素な形が鐔に求められるようになったということ。
- ④ 鐔は応仁の大乱以前には権威と品格とを表現する装具であったが、それ以後、専門の鐔工の登場によって強度が向上してくると、乱世において生命の安全を保証してくれるかのような安心感が求められるようになったということ。
- ⑤ 鐔は応仁の大乱以前には刀剣の拵の一部に過ぎないと軽視されていたが、乱世においては武器全体の評価を決定づけるものとして注目され、戦いの場で士気を鼓舞するような丈夫で力強い作りが求められるようになったということ。

問3

傍線部B「どうも知識の遊戲に過ぎまいという不安を覚える」とあるが、そこには筆者のどのような考えがあるか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 仏教を戦国武士達の日常生活の糧となっていた思想と見なすのは軽率というほかなく、彼等と仏教との関係を現代人が正しく理解するには、説教琵琶のような、当時滲透していた芸能に携わるのが最も良い手段であるという考え。
- ② この時代の鐺にほどこされた五輪塔や経文の意匠は、戦国武士達にとつての仏教が、ふだん現代人の感じているような暗く堅苦しいものではなく、むしろ知的な遊びに富むものであることを示すのではないかという考え。
- ③ 戦国武士達に仏教がどのように滲透していたかを正しく理解するには、文献から仏教思想を学ぶことに加えて、例えば説教琵琶を分析して当時の人々の感性を明らかにするような方法を重視すべきだという考え。
- ④ この時代の鐺の文様に五輪塔や経文が多く用いられているからといって、鐺工や戦国武士達が仏教思想を理解していたとするのは、例えば仏教を葬式のためにあると決めつけるのと同じくらい浅はかな見方ではないかという考え。
- ⑤ 戦国武士達の日用品と仏教との関係を現代人がとらえるには、それを観念的に理解するのではなく、説教琵琶のような、当時の生活を反映した文化にじかに触れることで、その頃の人々の心を実感することが必要だという考え。

問 4

傍線部C「もし鉄に生があるなら、水をやれば、文様透は芽を出したであろう。」とあるが、それはどういうことをたとえているか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 実用的な鐔を作るためには鉄が最も確かな素材であったので、いくつもの流派が出現することによって文様透の形状は様々に変化していても、常に鉄のみがその地金であり続けたことをたとえている。
- ② 刀剣を実戦で使用できるようにするために鐔の強度と軽さを追求していく過程で、鉄という素材の質に見合った透がおのずと生み出され、日常的な物をかたどる美しい文様が出現したことをたとえている。
- ③ 乱世において武器として活用することができるとして鉄を鍛えていくうちに、長い伝統を反映して必然的に自然の美を表現するようになり、それが美しい文様の始原となったことをたとえている。
- ④ 「下剋上」の時代において地金を鍛える技術が進歩し、鐔の素材に巧緻な装飾をほどこすことができるようになったため、生命力をより力強く表現した文様が彫られるようになっていったことをたとえている。
- ⑤ 鐔が実用品として多く生産されるようになるにつれて、刀匠や甲冑師といった人々の技量も上がり、日常的な物の形を写実的な文様として硬い地金に彫り抜くことが可能になったことをたとえている。

問5

傍線部D「私は鶴丸透の発生に立会う想いがした。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 9。

- ① 戦乱の悲劇が繰り返された土地の雰囲気の色濃くとどめる神社で、巢を守り続けてきた鳥の姿に、この世の無常を感じ、繊細な鶴をかたどった鶴丸透が当時の人々の心を象徴する文様として生まれたことが想像できたから。
- ② 桜が咲きほこる神社の大樹に棲む鳥がいくつも巢をかけているさまを見て、武士達も太刀で身を守るだけでなく、鐔に鶴の文様を抜いた鶴丸透を彫るなどの工夫をこらし、優雅な文化を作ろうとしていたと感じられたから。
- ③ 神社の森で巢を守る鳥が警戒しながら飛びまわる姿を見ているうちに、生命を守ろうとしている生き物の本能に触発された金工達が、翼を広げた鶴の対称的な形象の文様を彫る鶴丸透の構想を得たことに思い及んだから。
- ④ 参拝者もない神社に満開の桜が咲く華やかな時期に、大樹を根城とする一羽の鳥が巢を堅く守る様子を見て、討死した信玄の子供の不幸な境遇が連想され、鶴をかたどる鶴丸透に込められた親の強い願いに思い至ったから。
- ⑤ 満開の桜を見る者もない神社でひたむきに巢を守って舞う鳥に出会い、生きるために常に緊張し続けるその姿態が力感ある美を体現していることに感銘を受け、鶴の文様を抜いた鶴丸透の出現を重ね見る思いがしたから。

問6 この文章の表現と構成について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) 波線部X「現代人が、言葉だけを辿って、思わせぶりの文句だとか、拙劣な歌だとか、と言ってみても意味がないのである。」と、波線部Y「だが、事実ではあるまいと言ったところで面白くもない事だ。」とに共通する表現上の特徴について最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は 10。

- ① 「言葉だけ」の「だけ」や「面白くも」の「も」のように、限定や強調の助詞により、問題点が何かを明確にして論じようとするところに表現上の特徴がある。
- ② 「と言ってみても」や「と言ったところで」のように、議論しても仕方がないと、はぐらかしたうえで、自説を展開しようとするところに表現上の特徴がある。
- ③ 「意味がない」や「面白くもない」のように、一般的にありがちな見方を最初に打ち消してから、書き手独自の主張を推し進めるところに表現上の特徴がある。
- ④ 「思わせぶりの」や「拙劣な」、「事実ではあるまい」のように、消極的な評価表現によって、読み手に不安を抱かせようとするところに表現上の特徴がある。

(ii) この文章は、空白行によって四つの部分に分けられているが、その全体の構成のとりえ方として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

① この文章は、最初の部分が全体の主旨を表し、残りの三つの部分がそれに関する具体的な話題による説明という構成になっている。

② この文章は、四つの部分が順に起承転結という関係で結び付き、結論となる内容が最後の部分で示されるという構成になっている。

③ この文章は、それぞれの部分の最後に、その部分の要点が示されていて、全体としてはそれらが並立するという構成になっている。

④ この文章は、人間と文化に関する一般的な命題を、四つの部分のそれぞれ異なる個別例によって論証するという構成になっている。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

第2問

次の文章は、牧野信一の小説「地球儀」の全文である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、本文の上の数字は行数を示す。(配点 50)

祖父の十七年の法要があるから帰れ——という母からの手紙で、私は二月(注1)月振りぐらいで小田原の家へ帰った。

「この頃はどつなの?」

私は父のことを尋ねた。

「だんだん悪くなるばかり……。」

母は押入を片附けながら云った。続けて、そんな気分を振り棄てるように、

「此方の家はほんとに狭くてこんな時には全く困つて了う。第一何処に何がしまつてあるんだか少しも分らない。」などと呟いていた。

「僕の事をおこっていますか?」

「カンカン!」

母は面倒くさそうに云った。

「ふふん!」

「これからもうお金なんて一文もやるんじゃないって——私まで大変おこられた。」

「チエツ!」と私はセセラ笑った。屹度そうくるだろうとは思っていたものの、明らかに云われて見るとドキツとした。セセラ笑つて見たところで、私自身も母も、私自身の無能とカラ元気とを却つて醜く感ずるばかりだ。

「もうお父さんの事はあてにならないよ。あの年になつての事だもの……。」

これは父の放蕩を意味するのだった。

「勝手にするがいいさ。」

私はおこったような口調で呟くと、^A如何にも腹には確然とした或る自信があるような顔をした。こんなものの云い方やこんな態度は、私がこの頃になって初めて発見した母に対する一種の^(注2)コケトリイだった。だが、私が用うのはいつもこの手段の他はなく、そうしてその場限りで何の効もないので、今ではもう母の方で、もう聞き飽きたよという顔をするのだった。

「もう家もお仕舞いだ。私は覚悟している。」と母は云った。

私は、母が云うこの種の言葉は凡て母が感情に走つて云うのだ、という風にばかり殊更に解釈しようと努めた。

「だけど、まアどうにかなるでしょうね。」

私は何の意味もなく、ただ自分を慰めるように易々と見せかけた。こんな私の楽天的な態度にもすっかり母は^(ア)愛想を尽かしていた。

母は、ちよつと笑いを浮べたまま黙つて、煙草盆を箱から出しては一つ一つ拭いていた。

私も、話だけでも、父の事に触れるのは厭になった。

「明日は叔父さん達も皆な来るでしょう。」

「皆な来ると云つて寄こした。」

また父の事が口に出そうになった。

「躑躅が好く咲いてる。」と私は云った。

「お前でも花などに気がつく事があるの。」

「そりゃ、ありますとも。」と私は笑った。母も笑った。

「ただでさえ狭いの^(注3)にこれ邪魔で仕様がな^(注3)い。まさか棄てるわけにもゆかず。」

母は押入の隅に嵩張つている三尺程も高さのある地球儀の箱を指差した。——私は、ちよつと胸を突かれた思いがして、辛うじて苦笑いを堪えた。そうして、

「邪魔らしいですね。」と慌てて云った。何故なら私はこの間その地球儀を思い出して一つの短篇を書きかけたからだだった。

それはこんな風に極めて感傷的に書き出した。——『祖父は泉水の隅の燈籠に灯を入れて来ると再び自分独りの黒く塗った膳の前に胡坐をかいて独酌を続けた。同じ部屋の丸い窓の下で、虫の穴が処々にあいている机に向つて彼は母からナシヨナル読本を習っていた。』

〔注6〕「シイゼエボオイ・エンドゼエガアル」と。母は静かに朗読した。竹筒の置ランプが母の横顔を赤く照らした。

「スピニアトップ・スピニアトップ・スピンスピンスピン——回れよ独樂よ、回れよ回れ。」と彼の母は続けた。

「勉強が済んだら此方へ来ないか、大分暗くなつた。」と祖父が云つた。母はランプを祖父の膳の傍に運んだ。彼は縁側へ出て汽車を走らせていた。

「純一や、御部屋へ行つて地球玉を持つてきて呉れないか。」と祖父が云つた。彼は両手で捧げて持つて来た。祖父は膳を片附けさせて地球儀を膝の前に据えた。祖母も母も呼ばれてそれを囲んだ。彼は母の背中に凭り掛つて肩越しに球を覗いた。

「どうしても俺にはこの世が丸いなどとは思われないが……不思議だなア」祖父はいつもの通りそんなことを云いながら二三遍グルグルと撫で回した。「ええと、何処だつたかね、もう分らなくなつてしまつた、おい、ちよつと探して呉れ。」

こう云われると、母は得意げな手附で軽く球を回して直ぐに指でおさえた。

「フエーヤー？ フエーヤー……チョツ！ 幾度聞いても駄目だ、直ぐに忘れる。」

〔注7〕「ヘーヤーヘブン。」と母は立所に云つた。

それは彼の父（祖父の長男）が行つてゐる処の名前だつた。彼は写真以外の父の顔を知らなかつた。

「日本は赤いから直ぐ解る。」

祖父は両方の人差指で北米の一点と日本の一点とをおさえて、

「どうしても俺には、ほんとうだと思われない。」と云つた。

祖父が地球儀を買つて来てから毎晩のようにこんな団樂が醸された。地球が円いということ、米國が日本の反対の側にあること、長男が海を越えた地球上の一点に呼吸していること——それらの意識を幾分でも具体的にするために、それを祖父は買つて

来たのだった。

60

「何処までも穴を掘って行ったら仕舞にはアメリカへ突き抜けてしまうわけだね。」

こんなことを云つて祖父は、皆なを笑わせたり自分もさびしげに笑つたりした。

「純一は少しは英語を覚えたのかね。」

「覚えたよ。」と彼は自慢した。

「大学校を出たらお前もアメリカへ行くのかね。」

「行くさ。」

65

「若しお父さんが帰つて来てしまつたら？」

「それでも行くよ。」

そんな気はしなかったが、^(イ)間が悪かつたので彼はそう云つた。彼はこの年の春から尋常^(注8)一年生になる筈^{はず}だった。

「いよいよ小田原にも電話が引けることになった。」

或る晩祖父はこんなことを云つて一同を驚かせた。「そうすれば東京の義郎とも話が出来るんだ。」

70

「アメリカとは？」彼は聞いた。

「海があつては駄目だろうね。」

祖父は真面目な顔で彼の母を顧みた。

彼は誰も居ない処でよく地球儀を弄^{もてあそ}んだ。グルグルと出来るだけ早く回転させるのが面白かつた。そして夢中になつて、

「早く廻^{まわ}れ早く廻^{まわ}れ、スピンスピンスピン。」などと口走つたりした。するといつの間にか彼の心持は「早く帰れ早く帰れ。」とい

75

う風になつて来るのだった。』

そこまで書いて私は退屈になつて止めたのだつた。いつか心持に余裕の出来た時にお伽噺^{とぎばなし}にでも書き直そうなどと思つてい

るが、それも今まで忘れていたのだつた。球だけ取り脱^{はな}して、よく江川^(注10)の玉乗りの真似^{まね}などして、

「そんなことをすると罰が当るぞ。」などと祖父から叱られたりした事を思い出した。
「古い地球儀ですね。」

「引越しの時から邪魔だった。」

それからまた父の事がうつかり話題になつてしまった。

「私はもうお父さんのことはあきらめたよ。家は私ひとりで行くよ。」と母は堅く決心したらしくきつぱりと云つた。私はたゞいもなく胸が一杯になった。そうして口惜しさの余り、

「その方がいいとも、帰らなくなつた方がいいや、……帰るな、帰るなだ。」と常規を脱した妙な声で口走つたが、丁度『お伽噺』の事を思い出した処だったので、**B** 突然テレ臭くなつて慌てて母の傍を離れた。

翌日の午には、遠い親類の人達まで皆な集つた。

「せめて純一がもう少し家のことを……」

「そういう事なら親父でも何でも遣り込めるぐらいなウ 気概がなければ……」

「ほんとにカゲ弁慶で——その癖この頃はお酒を飲むと無茶なことを喋つて却つて怒らせてしまふんですよ。」

「酒！ けしからん。やつぱり系統かしら。」

叔父と母とがそんなことを云っているのを私は襖越しで従兄妹達と陽気な話をしながら耳にした。私のことを話しているのだ——。

「この間も酷く酔つて……外国へ行つてしまふなんて云い出して……」

「純一が！ 馬鹿な。」

「無論、あの臆病にそんなことが出来る筈はありませんがね。」と母は笑つた。

「気の小さい処だけは親父と違ふんだね。」

客が皆な席に整うと、私は父の代りとして末席に坐らせられた。坐っただけでもう顔が赤くなつた気がした。

「今日はわざわざ御遠路の処をお運び下さいまして……(ええと?) 実は……その誠に恐縮なこと……その実は父が四五日前から止むを得ない自分自身(オツといけねエ)……ええ、止むを得ない自分用で、実はその関西の方へ出かけまして、今日は帰る筈なのでございますが未だ……それで私が……(チョッ、弱つたな)……どうぞ御ゆるり……」

私はこれだけの挨拶をした。括弧の中は胸での呟き言だつた。ちゃんと母から教わつた挨拶でもつと長く喋らなければならなかつたのだが、これだけ云うのに三つも四つもペコペコとお辞儀ばかりしてごまかしてしまつた。そしてこの挨拶のしどろもどろを取り直すつもりで、胸を張つて出来るだけ尤もらしい顔付をして端坐した。だが脇の下にはほんとうに汗が滲んでいた。

「これが本家の長男の純一です。」

父方の叔父が、未だ私を知らない新しい親類の人に私を紹介した。そして私の喋り足りないところを叔父が代つて述べた。

大分酒が廻つて来て、祖父の話が皆なの口に盛んにのぼつていた時、私は隣りに坐っている叔父に、

「僕の親父は何故あんなに長く外国などへ行つていたんでしょね。」と聞いた。今更尋ねる程の事もなかつたのに――。

「やつぱりその……つまりこのお祖父さんとだね、いろいろな衝突もあつたし……」

――やつぱり――と云つた叔父の言葉に私はこだわつた。

「何ほ衝突したと云つたつて……」

「今これでお前が外国へ行けば丁度親父の二代目になるわけさ。ハッハッハッ……」

C 「ハッハッハ……。まさか――」と私も叔父に合わせて笑つたが、笑いが消えないうちに陰鬱な氣に閉された。

翌日、道具を片附ける時になると母はまた押入の前で地球儀の箱を邪魔にし始めた。

「見る度に焦れつたくなる。」

「そんな事を云ったって、仕様がなないじゃありませんか。」と私は云った。「どうすることも出来ない。」
 「大して邪魔と云う程でもない。」

「だってこんなもの、こうして置いたって何にもなりはしない、いっそ……」
 母は顔を顰めて小言を云っていた。

D

——今に英一が玩具にするかも知れない——私はも少しでそう云うところだったが、突然またあの「お伽噺」を思い出すと、
 自分で自分を操るような思いがして、そのまま言葉を呑み込んでしまった。

英一というのは去年の春生れた私の長男である。

(注) 1 小田原——現在の神奈川県小田原市。

2 コケトリイ——コケツトリ。媚を含んだ振る舞い。

3 三尺——約九〇センチメートル。

4 泉水——庭園につくった池。

5 ナショナル読本——明治時代の英語教科書の一つ。

6 シイゼエボオイ・エンドゼエガアル——「その少年と少女を見よ」の意味。

7 ヘーヤーヘブン——アメリカ合衆国マサチューセッツ州にある地名。

8 尋常一年生——現在の小学校に当たる旧制の初等学校の一年生。

9 お伽噺——当時は、昔話や伝説だけではなく、子ども向け物語の総称としても使われた。

10 江川の玉乗り——明治時代、東京で人気を集めた江川作蔵一座の曲芸、あるいはその芸人。

11 常規——常識。ものごとの標準。

12 も少し——「もう少し」に同じ。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 14。

(ア) 愛想を尽かしていた

12

- ① 嫌になってとりあわないでいた
- ② すみずみまで十分に理解していた
- ③ 体裁を取り繕うことができないでいた
- ④ いらだちを抑えられないでいた
- ⑤ 意味をはかりかねて戸惑っていた

(イ) 間が悪かった

13

- ① 気持ちが揺らいでしまった
- ② 相手にするのが煩わしかった
- ③ 言外の意味を理解できなかった
- ④ 深く考える余裕がなかった
- ⑤ 正直に言うのが気まずかった

(ウ) 気概

14

- ① 大局的にも物を見る精神
- ② 相手を上回る周到さ
- ③ 物事への思慮深さ
- ④ くじけない強い意志
- ⑤ 揺るぎない確かな知性

問2

傍線部A「如何にも腹には確然とした或る自信があるような顔をした」のはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

- ① 父の高圧的な言動をあえて意に介さない態度を示して、母の期待に応えるふりをしたかったから。
- ② 父の支えなど必要としないかのように強がってみせて、母の言葉に調子を合わせたかったから。
- ③ 父を懲らしめる手段があるかのようなふりをして、母の機嫌を取って話をそらしたかったから。
- ④ 父が家に戻ってくるという確信があるかのようにふるまって、母の悩みを打ち消してやりたかったから。
- ⑤ 父を家に戻す良案を持っているかのようなそぶりを見せて、母の関心をそちらに向けたかったから。

問3

傍線部B「突然テレ臭くなつて慌てて母の傍を離れた」のはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16。

- ① 父には頼らない生活を始めるという母の決意を頼もしく受け止めたが、今後とも父親からの金銭的援助をあてにしている自分を思い出し、母の決意とかけ離れている自分を恥ずかしく感じたから。
- ② 父との決別による困窮を覚悟する母に同調せざるを得なかったが、短篇の執筆にかまけるなど母に頼るばかりの自分の生活を改めて意識し、経済的に自立できていない自分を恥ずかしく感じたから。
- ③ 新たな生活をしようとする母を支えていくと宣言したが、夢想がちであつた子ども時代の思い出に浸り続けていたことを思い返し、過去にばかりとらわれ現実を直視できない自分を恥ずかしく感じたから。
- ④ ひとりで家を支えていくという母の覚悟に心を大きく動かされたが、短篇の中に不在の父を思う温かな家族の姿を描いたことを改めて意識し、感情に流されやすく態度の定まらない自分を恥ずかしく感じたから。
- ⑤ 母を苦しめる父を拙い言葉を用いてののしつたが、大人に褒められたいとばかり考えていた幼い自分を短篇の中に描いたことを思い出し、いつまでも周囲に媚びる癖の抜けない自分を恥ずかしく感じたから。

問 4

傍線部C『ハッハッハ……。まさか——』と私も叔父に合せて笑ったが、笑いが消えないうちに陰鬱な気に閉された。」とあるが、このときの私の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17

① 父が家族を顧みることなく長く外国に行っていた理由を本心から知りたかったのに、父と祖父との衝突をほのめかすだけで自分を「二代目」と呼んで話題をそらした叔父に失望し、その叔父以上に父のことを見下している母にも落胆している。

② 父の不在を半ばあきらめつつも受け入れ難く感じてその理由をあえて尋ねたのに、母と調子を合わせるように父と自分とを嘲笑する叔父に失望したが、叔父の言葉には自分を省みざるを得ない面もありあいまいな返事しかできなかったことに自己嫌悪をも感じている。

③ 家族を顧みない父をかばうために母に命じられた苦手な役割も懸命につとめたことを評価してほしかったのに、結局父と同じような失敗をして恥をかくはめになった自分の不出来に失望し、父と私とが果たすべき役割にまで出しゃばってくる叔父が母の共感を得ていることにも嫉妬を隠せないでいる。

④ 父が不在がちのまま育った不満を叔父に理解してほしくて思い切って質問をしたのに、母に同調しながら父と自分とを揶揄する叔父の軽薄さに失望したが、かといって祖父の悲しみを思えば正面切って叔父に反発することもできず無力感に浸っている。

⑤ 家を長く不在にしてきた父のことを叔父と共に責めようと思って話を切り出したのに、父に代わって本家の務めを果たそうとする努力を認めてくれない叔父に失望し、その叔父に頼りきっている母もまた自分の立場を守ってはくれないだろうと悲観的になっている。

問5

傍線部D「自分で自分を操るような思いがして、そのまま言葉を吞み込んでしまった」とあるが、このときの私の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

① 父の放蕩を思い出させるものとして母が目障りに思う地球儀が、私にとっては父への愛憎半ばする複雑な思いの象徴であることを思い返し、それを遊び道具として引き継ぐかもしれない息子がふがいない自分をどこかで慕ってくれるのではないかと身勝手な想像をして気恥ずかしさを感じている。

② 父の放蕩を思い出させるものとして母が目障りに思う地球儀が、私にとっては短篇に描いた家族との絆きずなを象徴するものであったことを思い出し、それを玩具として使うであろう息子の成長を見守り父親としてその人生を支えていくと過剰に気負い立つ自分に気づいてきまりが悪い思いをしている。

③ 父の放蕩を思い出させるものとして母が目障りに思う地球儀が、私にとってはまだ幸福に包まれていた家族の記憶の象徴であったことを思い出し、息子にも幸せな家庭を築いてほしいとの思いから地球儀を彼に引き継ぎたいと主張した自分の思い入れの強さに苦笑したい気持ちになっている。

④ 父の放蕩を思い出させるものとして母が目障りに思う地球儀を、そうした事情を知らない息子が玩具として無邪気に使うかも知れないと想像し、家庭的に恵まれなかったことを理由に少年時代を過剰な感傷とともに振り返ろうとしがちな自分を照れくさく思っている。

⑤ 父の放蕩を思い出させるものとして母が目障りに思う地球儀を、私にとっては自分の目指すべき世界を指し示し続けるものとして短篇に描いたことを思い出し、自分もまた息子にとつての目標となりえるのではないかという自負に満ちた期待がよぎったことに意外な驚きを覚えている。

問6

この文章の表現に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。
解答番号は 19 ・ 20 。

- ① この文章は、祖父の法要の前後三日間と私が書きかけた短篇に描かれる家族の団欒との二つの場面に大きく分けられるが、どちらの場面も一人称を使つて語られることによつて、祖父や父母に対する私の思いや感情が詳細に描き出されている。
- ② この文章は、登場人物同士の会話が軸の一つとなつて展開しており、私の発言には、「です・ます」調の丁寧な言い方とそうでない言い方との両方が用いられたり、場面によつては（ ）が挿入されたりする。それによつて、話し相手や話題にその場しのぎの態度で応じがちな私の性格が表されている。
- ③ この文章では、記号「――」と「……」が多用されている。地の文では、場面や人物の状況・状態を説明するために「――」を用い、会話の中では、余韻や間を表すために「……」を用いることで、それぞれの役割に応じた使い分けがなされている。
- ④ 38行目から75行目の部分では、地球儀にまつわる私の過去を題材にした短篇を引用している。この引用によつて、短篇に幼い「純一」の姿や家族への思いを描いた私の心の動きが読者に印象づけられ、それが私という人物を重層的に描き出す効果を生んでいる。
- ⑤ 41行目の「シイゼエボオイ・エンドゼエガアル」や42行目の「スピニアトップ・スピニアトップ・スピンスピンスピン」に見られるように、カタカナを用いて母の英語のぎこちなさを表現することで、初歩的な英語すら満足に話せない母をアメリカで生活する父と対比し、両者に生じている隔たりを比喩的に表している。
- ⑥ この文章の地の文は、文末に「た」を用いた表現になっているが、124行目の「英一」というのは去年の春生れた私の長男である。」という最後の一文だけに現在形が用いられている。これにより、祖父の法要での前後三日間と挿入された短篇中の時間との区別を曖昧にしている。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

第3問

次の文章は『松陰中納言物語』の一節である。東国に下った右衛門督は下総守の家に滞在中、浦風に乗って聞こえてきた琴の音を頼りに守の娘のもとを訪れ、一夜を過ごした。以下の文章は、それに続くものである。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

つとめて、御文やらせ給はんも、せん方のおはしまさねば、^(ア)いと心もとなくて過ぐし給ひけるに、主人のまゐり給うて、「昨日の浦風は、御身には染ませ給はぬにや。いと心もとなくて」と啓し給へば、^(注1)琴の音^bにやあるらんとおぼしき色香にこそ候ひつれ。唐琴にや、ゆかしくこそ」とのたまはすれば、思はずながら、取り寄せつ。調べさせ給ひて、「波の音に立ちまざりけるも、むべ^cにこそあなれ」とて、箱に入れさせ給ふとて、御文を緒に結びつけさせて、「これ、ありつる方へ」とて、差し置かせ給へば、持て入りぬ。女君は、琴を召しけるを、あやしと思ひて、開けて見させ給へば、^(イ)飽かざりし名残をあそばして、

「A あひみての後こそ物はかなしけれ人目をつつむ心ならひに

今宵は、いとく人をしづめて」

(注2)

とありけれども、いかにせんとも思ひわき給はず。幼き弟君の、「客人の方へまゐらんに、扇を昨日、海へ落とし侍り。賜はらむ」とのたまひにおはす。何の、よきことと思ひて、端に小さう書き給ひて、「この絵は、おもしろう書きなしたれば、殿に見せさせ給へ。さもあらば、小さき大をこそ、賜ひぬべけれ」とうち笑ませ給へば、よろこびひて、母君の方へまゐらせ給ひて、「扇をこそ、賜はりつれ」とて、見せさせ給へば、歌を見つけ給うて、あやしきことに思ふ。なほ、気色を見ればやと、後に立ちて、屏風の隠れより覗き給へり。「この扇の絵を見させ給へ。姉君の、かくこそ」とのたまへれば、まことにいみじくこそ書きなしたつれとて、見給へれば、

B かなしさも忍ばんことも思ほえず別れしままの心まどひに

今朝の琴の返しならむと思ひて、「この扇は、我に賜ひなん。犬をこそ、まゐらすべかめれ。京にあまたありつれば、取り寄

せてこそ、そのほどに」とて、黄金にて造りし犬の香箱を賜はせて、「姉君に見せ給へかし」とのたまへれば、持て入り給へるを、母君、いとどあやしと思して、「我にも見せよかし」とて、取りて見給へるに、**X** さればよ、昨日の琴の音をしるべにこそし給ふらめと思せど、気色を見えじと、もて隠し給へり。姉君の方へおはして見せ給ひつれば、「我がものにせん」とて、取らせ給ひて、「この犬をこそ」とのたまはすれば、「我が言葉は違ふまじければ」とて、蓋を取りて見給ひければ、内の方に、

C 別れつる今朝は心のまどふとも今宵と言ひしことを忘るな

惜しくは思せど、人もこそ見めとて、掻い消ち給へり。

母君は、忍びますらんも心苦しからむとて、右近を召して、「今宵、殿の渡し給はんぞ。よくしつらひ給へ。行く末、頼もしきことにてあるなれば」とのたまはすれば、さればよ、今朝よりの御ありさまも、昨日の樂を弾き替へ給ひしも、心もとなかりつればとて、かくとも言はで、几帳かけ渡し、隈々まで塵を払へば、「蓬生の露を分くらむ人もなきを、さもせずともありなし」とのたまへれば、**Y** 蓬の露は払はずとも、御胸の露は今宵晴れなんものを」とうち笑へば、いと恥づかしと思す。

(注) 1 啓し給へば——「啓す」は、ここでは右衛門督に敬意を表すために使用している。

2 客人——右衛門督のこと。「殿」とも呼ばれている。

3 我が言葉——扇を渡すときの「小さき犬をこそ、賜ひぬべけれ」という言葉を指す。

4 右近——女君に仕える侍女。

5 樂を弾き替へ給ひしも——女君が唐琴で弾く「太平樂」に合わせて右衛門督が笛を吹き鳴らしたあと、右衛門督が吹く「想夫恋」(女性が男性を恋い慕うという楽曲)に、女君が弾き合わせたことをいう。

問 1

傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

23

(ア)

いと心もとなくて過ぐし給ひける

21

- ① そんなに気にも留めずに見過ごしていらつしやった
- ② たいそう気をもんで時を過ごしていらつしやった
- ③ ひどく不安に思つてそのままにしていらつしやった
- ④それほど楽しくもないまま過ごしていらつしやった
- ⑤ たいへんぼんやりと日を送つていらつしやった

(イ)

飽かざりし名残をあそばして

22

- ① 語りつくせなかつたつらさを琴の音にこめられて
- ② 物足りなかつた逢瀬おうせの悲しみを何度も思い返されて
- ③ 見飽きることのない面影を胸に思い浮かべなかつた
- ④ 満ち足りないままに別れた思いをお書きになつて
- ⑤ 聞き飽きることのない琴の余韻に浸つておいでになつて

(ウ)

いみじくこそ書きなしつれ

23

- ① いつもより丁寧に書き込んである
- ② ひどく悲しげに書き入れてある
- ③ ことさらに美しく書き上げてある
- ④ とりわけ得意げに書き加えてある
- ⑤ いかにも愛情深く書き表してある

問2

波線部 a ～ d の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

24。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------------|---|-----------|---|-----------|---|------------|
| ① | a | 打消の助動詞 | b | 断定の助動詞 | c | 形容動詞の活用語尾 | d | 完了(強意)の助動詞 |
| ② | a | 完了(強意)の助動詞 | b | 格助詞 | c | 断定の助動詞 | d | 動詞の活用語尾 |
| ③ | a | 打消の助動詞 | b | 形容動詞の活用語尾 | c | 格助詞 | d | 打消の助動詞 |
| ④ | a | 完了(強意)の助動詞 | b | 格助詞 | c | 形容動詞の活用語尾 | d | 打消の助動詞 |
| ⑤ | a | 打消の助動詞 | b | 断定の助動詞 | c | 格助詞 | d | 完了(強意)の助動詞 |

問3 傍線部X「さればよ」とあるが、誰が、どのようなことを思ったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤

のうちから一つ選べ。解答番号は

25。

- ① 女君が、琴の音色にひかれて訪れた右衛門督と心を通わせたのも、弟君を介して母君に知られないように文のやりとりができたのも、何かの縁があつたからだと思ひ、不思議な運命に導かれていると思つた。
- ② 女君が、弟君を介した右衛門督との密かなやりとりを母君に見破られ、二人の仲を怪しまれたことに気づき、やはり隠し通せなかつたとあきらめながらも、気まずい気持ちを母君に悟られたくないと思つた。
- ③ 母君が、右衛門督と女君の間でやりとりが交わされているのに気づき、ぎこちない様子を齒がゆく感じながらも、口をはさんで二人の仲が表ざたになつてしまうと困るので、見て見ぬふりをしようと思つた。
- ④ 母君が、沈み込んでいた娘の様子を見て心配していた通り、案の定、女君が右衛門督の洗練された様子に心を奪われて、何も手につかなくなっているのだとわかり、大変なことになつてしまつたと思つた。
- ⑤ 母君が、弟君の持つていた扇に書き添えてあつた和歌を読んで不審に思つていた通り、右衛門督と女君がすでに心を通わせていて、今夜再び会おうとしてることがわかり、喜ばしいことだと思つた。

問 4

傍線部 Y「蓬の露は払はずとも、御胸の露は今宵晴れなんものを」とあるが、この言葉には右近のどのような気持ちがこめられているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

26。

- ① 訪ねてくるかわからない人を思つて掃除までしなくてもよいと言う女君に対して、部屋の塵は払えなくても心配事は払うことができるかと明るく励ます気持ち。
- ② 踏み分けられないほど蓬が茂った庭を恥ずかしがる女君に対して、庭の手入れまで手が回らなくても、きちんと部屋を掃除しているから大丈夫と慰める気持ち。
- ③ 訪ねてくる人もいないのになぜ掃除するのかと不思議がつている女君に対して、今夜はお客さまの右衛門督が訪れるから必要なだと安心させる気持ち。
- ④ 誰も来るはずはないから掃除の必要はないのと言う女君に対して、右衛門督の訪れをひそかに待つている女君の心はわかつているとからかう気持ち。
- ⑤ 露に濡れた蓬を分けて訪れる人もないのにとすねる女君に対して、右衛門督を思つて沈んでいる女君の胸の内を晴れやかにするための掃除なのにと反発する気持ち。

問5

AとCの和歌に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

27。

① Aは右衛門督の歌で、つねに人目を気にせずにはいられないために、思うように会いに行けず、会う前よりも募る恋の苦しみを詠んでいる。Bは女君の歌で、別れた後は悲嘆にくれて分別がなくなってしまう、右衛門督のもとに忍んで行く手段も思いつかないと訴えている。

② Aは右衛門督の歌で、会って愛情は深まったのに人目を気にするために昼間は会いに行けず、恋が成就した今になって、さらに募る恋情を詠んでいる。Bは女君の歌で、別れた後の心の乱れのために、右衛門督とは違って悲しみに浸ったり人目を気にしたりする心の余裕がないと訴えている。

③ Aは右衛門督の歌で、ともに演奏を楽しんだのに向に進展しない二人の仲を悲しく思い、人目を気にしがちな女君への不満を詠んでいる。Cも同じく右衛門督の歌で、別れた直後の今朝、冷静さを失って思わず書いた今夜の再会の約束を、真剣に受け止めるよう念を押している。

④ Bは女君の歌で、別れた後の乱れてしまった心のまま、右衛門督を恋い慕う感情と、恋心を抑えねばならないという理性が入り乱れた状態だと訴えている。Cは右衛門督の歌で、どれほど思い乱れているとしても、二人で交わした今夜の再会の約束は忘れないでほしいと念を押している。

⑤ Bは女君の歌で、別れる際に心をかき乱されたつらさに加えて、会えない悲しみに堪え続けることの苦しきをも訴えている。Cは右衛門督の歌で、別れた直後の今朝はどれほど心がかき乱されていたとしても、自分が今夜訪れると言った言葉を忘れずに待っていてほしいと念を押している。

問6 この文章の表現と内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

28。

① 「浦風」「海」とあるように都から遠く離れた場所が舞台となり、「波の音」などの聴覚に訴える表現や「蓬」などの自然の描写によって東国のひなびた情趣が表される一方で、「琴の音」を響かせる女君のみやびな風情が対比的に描かれ、都人である右衛門督が女君に心ひかれるいきさつが明らかにになっている。

② 敬語を重ねて高い敬意を表す「染ませ給はぬにや」「調べさせ給ひて」「入れさせ給ふとて」のような表現が都人の右衛門督に対してのみ用いられ、東国暮らしの女君には用いられていないことから、二人の身分の差がはつきりわかるようになっており、身分違いの恋に試練が待ち受けていることを予感させている。

③ 「人目」「人をしづめ」「人もこそ見め」など、他人を意識する右衛門督と女君の様子が繰り返し描かれることと、そのやりとりの合間に母君や右近の察しの良い反応が差し挟まれることによって、周囲の「人」に認めてもらうことを恋の成就の重要な条件と考える右衛門督たちの心が読み取れるようになっていく。

④ 女君と右衛門督とが、「唐琴」「小犬」「香箱」に添えて贈り合う歌の言葉が、Aの「あひみて」「かなしけれ」「心ならひ」からBの「別れ」「かなしき」「心まどひ」とつながり、さらにCの「別れ」「心のまどふ」へと受け継がれており、互いの歌の言葉に^{こた}応えながら少しずつ心を通わせていく二人の心情の変化が描かれている。

⑤ 女君と右衛門督のやりとりに敏感に反応し行動する母君や右近の様子とは対照的に、右衛門督に求められて「思はずながら」琴を取り寄せてしまう下総守や、「小さき犬をこそ、賜ひぬべけれ」「犬をこそ、まゐらすべかめれ」などの言葉に喜んで知らないうちに文の使いをさせられている弟君の様子が、巧みに描かれている。

第4問

次の文章を読んで、後の問い(問1～8)に答えよ。(設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。)

(配点 50)

始^ス余^ニ以^テ丙^{ヘイ}子^シ秋^ヨ寓^{グウ}居^{キヨス}宛^{アン}丘^{キウ}南^{ナン}門^{モン}靈^{レイ}通^{ツウ}禪^{ゼン}刹^{サク}之^ノ西^{セイ}堂^{ドウ}是^ニ歲^{サイ}季^キ冬^{トウ}手^テ植^ウ兩^{リウ}海^{カイ}棠^{ドウ}于^ニ堂^{ドウ}下^カ至^リ丁^{テイ}丑^{チュ}之^ノ春^{シュン}時^ジ沢^{タク}屢^{リョ}至^リ棠^{ドウ}茂^{マウ}悦^{エツ}也^ヤ仲^{チュウ}春^{シュン}且^ニ華^{サカ}矣^ヤ余^ニ約^シ下^カ常^{ジョウ}所^{ショ}与^ニ飲^ム者^ト且^ツ致^シ美^{メイ}酒^{ジュ}将^ニ一^{イチ}醉^{セイ}于^ニ樹^{ジュ}間^{カン}是^ニ月^{ゲツ}六^{リク}日^{ニチ}予^ニ被^リ謫^{タク}書^{ショ}治^シ行^ケ之^ノ黄^{ワウ}州^{シュ}俗^{ソク}事^ジ紛^{フン}然^ニ余^モ亦^タ遷^{ウツ}居^コ因^{リテ}不^ニ復^フ省^{シユ}花^カ到^{リテ}黄^{ワウ}且^ニ周^{シュウ}歲^{サイ}矣^ヤ寺^シ僧^{ソウ}書^{ショ}来^キ言^フ花^カ自^ニ如^ニ也^ヤ余^ニ因^{リテ}思^フ茲^{コノ}棠^{ドウ}之^ノ所^ヲ植^{エシ}去^{ルコト}余^ニ寢^ヨ無^ク十^{ジュ}步^ポ欲^ス与^ニ隣^{リン}里^リ親^{シン}戚^{セキ}一^{イチ}飲^{カン}而^{シテ}樂^{ラク}之^ヲ宜^{シク}可^キ必^ズ得^{ケル}無^キ難^{ナン}也^ヤ然^{レドモ}垂^{ナン}至^{シテ}而^{シテ}失^フ之^ヲ事^ジ之^ノ不^レ可^カ知^ル如^シ此^ノ今^{イマ}去^{ルコト}棠^{ドウ}且^ニ千^{セン}里^リ又^タ身^ハ在^{リテ}罪^{ズイ}籍^{セキ}其^ノ行^ケ止^ム未^ダ能^ハ自^ラ期^{スル}其^ノ于^ニ棠^{ドウ}未^ダ遽^{ニハ}

得^ル見^ル也。然^{レドモ}均^{シク}于^{イテハ}不^{ルニ}可^{カラ}知^ル、則^チ亦^タ安^ニ知^ル此^ニ花^ニ不^ニ忽^ニ然^ニ在^ニ吾^ニ目^ニ前^ニ乎^ニ。

(張耒『張耒集』による)

(注)

- 1 丙子——十千十二支による年の呼び方。北宋の紹聖三年(一〇九六)。
- 2 宛丘——現在の河南省にあった地名。
- 3 靈通禪刹——靈通は寺の名。禪刹は禪宗の寺院。
- 4 海棠——バラ科の花樹。春に紅色の花を咲かせる。
- 5 丁丑——十千十二支による年の呼び方。北宋の紹聖四年(一〇九七)。
- 6 時沢——時宜を得て降る雨。
- 7 茂悦——盛んにしげり成長していること。
- 8 謫書——左遷を命じる文書。
- 9 治行——旅支度をする。
- 10 黄州——現在の湖北省にあった地名。
- 11 俗事紛然——世の中が騒がしいこと。ここでは、当時の政変で多くの人物が処罰されたことを指す。
- 12 自如——もとのまま。ここでは、以前と同じように花を咲かせたことをいう。
- 13 行止——出処進退。

問 1 傍線部(1)「手」・(2)「致」と同じ意味の「手」「致」を含む熟語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 29 ・ 30。

(1)					(2)				
29 「手」					30 「致」				
⑤	④	③	②	①	⑤	④	③	②	①
手	手	手	拳	名	一	風	極	招	筆
法	腕	記	手	手	致	致	致	致	致

問2 傍線部A「時沢屢至、棠茂悦也」から読み取れる筆者の心情として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一

つ選べ。解答番号は 31。

- ① 恵みの雨を得て海棠が喜んでいるように、筆者自身も寺院での心静かな生活に満足を感じている。
- ② 春の雨が海棠を茂らせることに今年の豊作を予感し、人々が幸福に暮らせることを期待している。
- ③ 恵みの雨を得て茂る海棠の成長を喜びつつも、宛丘での変化のない生活に退屈を覚え始めている。
- ④ 春の雨に筆者は閉口しているが、海棠には恵みの雨であると思い直して花見を楽しみにしている。
- ⑤ 恵みの雨を得て茂る海棠を喜びながらも、雨天の続く毎日に筆者は前途への不安を募らせている。

問3 傍線部B「不_レ復_レ省_レ花」から読み取れる筆者の状況を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから

一つ選べ。解答番号は 32。

- ① 筆者は政変に際して黄州に左遷され、ふたたび海棠を人に委ねることになった。
- ② 筆者は政変に際して黄州に左遷され、もう一度海棠を移し替えることができなかった。
- ③ 筆者は政変に際して黄州に左遷され、それきり海棠の花を見ることがなかった。
- ④ 筆者は政変に際して黄州に左遷され、またも海棠の花見の宴を開く約束を果たせなかった。
- ⑤ 筆者は政変に際して黄州に左遷され、二度と海棠の花を咲かせることはできなかった。

問 4

傍線部 C「寺僧書来」について、このことがあったのはいつか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 筆者が左遷された年の春。
- ② 筆者が左遷された年の歳末。
- ③ 筆者が左遷された翌年の春。
- ④ 筆者が左遷された翌年の歳末。
- ⑤ 筆者が左遷された二年後の春。

問5 傍線部D「欲与隣里親戚一飲而樂之」について、返り点のつけ方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

34。

- ① 欲_下与_二隣里親戚_一一飲而樂_レ之
- ② 欲_下与_二隣里親戚_一二飲而樂_レ之
- ③ 欲_レ与_二隣里親戚_一一飲而樂_レ之
- ④ 欲_レ与_二隣里親戚_一二飲而樂_レ之
- ⑤ 欲_下与_二隣里親戚_一二飲而樂_レ之

隣里親戚と一飲せんと欲して之を樂しむは

隣里親戚と一飲して之を樂しまんと欲せば

隣里親戚の一飲に与_{あづか}らんと欲して之を樂しむは

隣里親戚に与らんと欲して一飲して之を樂しむは

隣里親戚に与へて一飲して之を樂しませんと欲せば

問 6

傍線部E「事之不可知如此」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

35。

- ① この地で知人を見つけれない事のいきさつは、このようである。
- ② 事の善悪を自分勝手に判断してはいけないのは、このようである。
- ③ 自分の事が他人に理解されるはずもないのは、このようである。
- ④ これから先に起こる事を予測できないのは、このようである。
- ⑤ 努力しても事が成就するとは限らないのは、このようである。

問7

傍線部F「安知此花不_ニ忽然在_ニ吾目前_一乎」について、書き下し文と解釈との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

①

〔書き下し文〕

安くにか此の花の忽然として吾が目前に在らざるを知るあらんか

〔解釈〕

どこにこの花が思いがけず私の目の前に存在することがないと分かる人がいるのか。

②

〔書き下し文〕

安くんぞ此に花の忽然として吾が目前に在らざるを知らんか

〔解釈〕

どうしてここで花が私の目の前から存在しなくなるとぼんやりとでも分かるのか。

③

〔書き下し文〕

安くんぞ此の花の忽然として吾が目前に在らざるを知らんや

〔解釈〕

どうしてこの花が思いがけず私の目の前に存在することがないと分かるだろうか。

④

〔書き下し文〕

安くにか此の花の忽然として吾が目前に在らざるを知るあらんや

〔解釈〕

どこにこの花が私の目の前に存在しないとぼんやりとでも分かる人がいるだろうか。

⑤

〔書き下し文〕

安くんぞ此に花の忽然として吾が目前に在らざるを知らんや

〔解釈〕

どうしてここで花が私の目の前から不意に存在しなくなると分かるだろうか。

問 8 この文章全体から読み取れる筆者の心境を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は

37

。

- ① 不遇な状況にある自分だが、しばらく過ごしただけの寺の僧からの手紙を受け取って、宗教的修行を積んだ人間への敬意を深め、ひいては人間という存在を信頼しようと思いを直している。
- ② 我が身の不遇はともかく、主のいなくなった海棠の行く末を心配しながらも、無心の存在である海棠と対照的に花への執着を捨てられない自分を嫌悪し、将来に対して悲観的になっている。
- ③ 不遇な状況に陥るやいなや人々から交際を絶たれるという体験を通して人を信じられなくなったが、これまでと変わることなく咲いた海棠の花によつて心がいやされ、安らぎを感じている。
- ④ 自分の不遇な状況には変化がないのに、海棠の花は以前と同じく華やかに咲いたという手紙を受け取って、現状から早く脱出したいと思いつつも何もできないと、焦燥感に駆られている。
- ⑤ 今は不遇な状況にある自分だが、いつの日か罪を許されて再び海棠の花を愛でるときが来るかもしれないと、悲しみに没入することなく運命を大局的にとらえ、乗り越えようとしている。

